

# 山の心と幼児の心



太田 愛人

過疎問題の余波が信州にまで及び、人口流出は人口の少ない山村では無人部落化しようとしている。何代も住み続けた藁葺の農家を出て、一家で町に移る例がふえ出した。

教育、医療、経済、いろいろな要素が拍車をかけている。そんな中で、大都市の住人が廃屋を買って四季の折々住みこみ、山村生活を始める人も少ないながらも目立つ。別荘暮らしでは生活感が乏しいという。黒光りする農家に住んでさきやかながら農事をする時、今まで都会で失われていた人間らしい息吹をとりもどすこ

とに気づいたらしい。

巷の生活から山暮らしに入って気づくことは「生けるものとの共存」であろう。木々、鳥、昆虫、魚、それらとのつきあいは、言語をこえた生存の確かめあいによっている。それを包んでいる自然は母の役割をはたしている。

林務官として人生の出発をしたフレールの胸中には、後年幼児教育者としてたつてからも戸外生活を重視し、自然の中の散歩者を理想としていた。「近くの高い山の頂から、私は鮮かなそして静かに沈みゆく太陽や、遙か彼方からバラ色

の光に輝く残雪や氷河や、アルプスの山脈を眺めて楽しんだ。実際夕方の散歩や晴朗な日の落ちた頃は私に欠くことの出来ない必要なものだった」と自伝で洩らしている。

本物のスイスアルプスには及ばないが、せめて日本アルプスぐらいで我慢しよう、フレールは流の林中生活を考えたのが五年前。山好き仲間をかりあつめて作つたのが、岳者村。本来、学者村があつたが戦中つぶれてしまった。岳者村と命名したのは、山にきてまで学問をするのは自然の道理に反するという訳で、学者のはしくれ共はこの名が気に入った。音楽家もいるがこの方は楽者と自称している。

目の前に鹿島槍、爺ヶ岳が夏でも雪をつけて聳え、木崎湖は夕映えに金色に染まる。山登りの行きつくところは山住いとなる。剣岳、槍、穂高、白馬、どこにいても山頂は空カンとゴミの山があり、山小屋は喧噪の渦、冬山でも昔とち

がって足跡がつき、汚物が道中散らばっている。

かくて知られざる山を入手して、住みはじめると、知名の山々のない生活感が次第に形づくられてくるのがうれしくなる。電気をひかずにランプを灯し、水道がわりに小川からひく箕、夜明けに目覚めて、日暮に眠る。時々窓から山鳩がとびこみ、春の山菜と秋のキノコが常食。湖のタニシは、泳ぎのついでに採ってくる。汗ばむ時は裸ですごす。

こうして原始生活が不自由さを感じさせないまでになれてくると幼児のもつ単純化された生活が理解できるようになってくる。レヴィ・ストロースが未開民族の中に入るときに、文明の器具を拒否して、ペンとノートだけ持つことを説いたのがよくわかる気がする。夏の日々、格好な幼児たちが訪ねてきて、不思議な交際が始まるのが実に楽しい。まさに「汝ら幼児の如くならずば……」の言葉が思っておこされてくる。

アッチャンは二歳半。無口で大食なのでウマがあう。遅寝遅起が山の生活とテンプがあわなかったようだが、徐々に慣れてきた。日頃テレビなしの生活をしているのでどこか悠々としている。

「お風呂にいこうよ」と海水パンツをはいて山をおりると、たのしそうについでくる。水泳は苦手でも、身体に石鹼をぬって湖水にゆっくりつかってはしゃいでいると綺麗になる。先生はもっとひどい。頭にシャンプーをぬって往復二百米もクロールで泳ぐと風呂あがりの爽かさが湧いてくる。夕方金色の波を乱し、時には葛の花びらが浮かぶ水面を泳ぎぬくと、アッチャンは手をたたく。湖底から採ったタニシを焼くと喜んで食べる。

父母がフランス留学中、誤って南瓜の代り瓜のうらごしをして与えたら、どんな食べて、あとで母親があわてたが腹一杯でニコニコしていた豪傑だ。父母の勉強の傍でプラモデル組立てに頭をつかっている岳者村紳士候補生。山ぐらしの

居候を終えて東京に帰ったら、家の前で尻をおろして入りたくないレジスタンスをおこした勇士に成長した。

クミちゃんは二歳十ヵ月、アッチャんに比べて恐ろしく舌がまわる。ジャーナリストの娘だけあって、夕方七時になるとテレビの前に一人で坐ってアナウンサーと「コンパンワ」とあいさつするのが日課らしい。そのテレビがない山にくとすべてのものが珍しいらしく、蟻がはっているのをじっとみつめている。「デパートで蟻まで売る世の中ですもの」と母親同士が話していると、不思議そうに聞いている。

夏の一、父母につれられて八方尾根の第三ケルンまで登ってきた。父母がフウフウいっているのにこの二歳児は足どりかるく二千米まで登ったという。「お花がきれいでした」と感想もいえる。何よりもこの幼児体験がいつまで持続できるかが気にかかる。

結婚前、針の木岳日帰り登山でフラフ

ラになって下山し、馬肉の刺身で元気を回復した行動派の母親は、物心がつく娘を、早速山登りにつれていったのは感動の伝達ともいえるだろう。財産や地位の考慮だけが、親からゆずりうけるものと考えている世の中で、こうした型の伝達が必要ではあるまいか。語学の教師の母から山の感動をうけついで娘はどう成長するだろうか。

ルベルトくんは一歳児、兄のエカルトくんがおとなしいのに比べて、活力にみちた赤ん坊である。涼しい田舎で一夏すごしている間に、野人生活が気になってしまったらしい。それでも主食の黒パンがなつかしかったらしく、軽沢村からの帰りドイツのレストランから買ってきた黒パンを土産に母親に手渡すと、それを手にしてかぶりついた。「しつけが悪いでしょう」とドイツ人の母親は、笑いながら氣先を制してしまった。

日本語では教会、英語ではスポーツカーをいちはやく覚えてしまったのは、車

でくる宣教師の父親の影響であろう。水浴が大好きで、毎日母に抱かれて湖の中で大はしゃぎをやる。少しぐらいの寒さも気にしない。母の腕の中にあつて、水という敵をいつの間にか友としてしまうすべを知っているのだ。水は危い、寒さで風邪をひくなど、自ら水に入ろうとしないで、岸で心配したり非難している母親が、どんなに子どもを不幸にしているか気づかないであろう。風呂に共に入らぬ水にも共に入るべきである。スキーや野球を知らなくても生命に関係ないが、水泳を知らないで生命を失う場合があるのだ。

湖の中の、満ちたりたルベルトくんの笑顔を見るたびに、「海の中に母がいる」とうたった三好達治の一行を思い出す。秋になって旅の帰りに京都在住の一家を訪ねた折、「おかえしです」といって焼きたての黒パンをいただいた。ルベルトくんはあいかわらずはしゃいで、京都弁でキサキコキサキコとくり返していた。

湖で泳ぎ、森を歩いた幼児たちは、再び巷に帰り、新しい生活をはじめめる。そして幼児たちは成長し、親たちは老いていく。しかし原始生活への憧憬はどんな機械化をされ、組織化された社会の中でも失われないであろう。

山ぐらしの退屈をまぎらわすためにルベルトくんのお母さんに貸してあげた、現代ドイツの牧師であり、詩人であり、作家であるゲースの詩集の中に「母が子どもに話します」と題した詩がある。これを訳して誕生祝に数人の母親に送ってあげたことがあった。

森と母と子とが見事に結びつけられ、喜びの中にも一抹の悲しさがたたえられて、忘れがたい詩として記憶にとどまっている。

〈母が子どもに話します〉

お前は存在、私は空間、

お前は木の実で私は樹木。

子よ、私の鶯色の乳房をお前の初めて  
の飲びの中におろし、

お前の初めての夢の中に私の像をおろ  
します。

お前が若者になると、私は年老い、

お前は私には小鳥で、私はお前の森に  
なり、可愛い声で囀り歌うと、私は木  
霊で響かせますよ、今日もまた。

—私がいつかは黙すのを誰かが知っ  
ています。

お前は大きくなって、私は小さくなり、  
大きな多くの夢が待っています。

だけどお前の新しい飲びは、  
もう母の胸には求めません。

その時は私だけが部屋の中で眠りま  
す。

森はくらくらなり、静かですよ。

秋から冬にかけての山は、この老境の  
心をよく代弁してくれる。夏の明るい陽

光が日毎に柔かく白さを加えると、湖に  
蓮の花が咲く。静かになった山が再び登  
高の意欲を昂めてくれる。海が母とすれ  
ば、山は父ともいえよう。

常に慈愛の中にもきびしさを蔵してい  
る。美しい花にかわって、小さなすっぱ  
い果実が紅くみのる頃には、高山には初  
雪をよぶ。父らしい愛を代弁するかのよ  
うな高山の木々の実を噛みながら登る山  
は、愉しさの中にも思考を育てる。

コケモモ、アケビ、ガンコウラン、ナ  
ツハゼ、ベニバナイチゴ、などが天然の  
実を提供してくれる。それらはカンズ  
メジュースを必要とさせない。凝縮され  
た、かくされた愛を噛むたびに感じさせ  
られる。山の中で咲いて実をつけて、地  
におとしてそのまま雪にうもれてしま  
うことを思うと、精一杯実をつけている植  
物にとって実を賞味してくれるのも、あ  
る厚意としてうけとってくれるのであろ  
う。つい腰をおろして食べていると陽脚  
は時を早く刻んでいく。秋のきびしきは

肌にも伝わってくる。紅葉からしたたる  
雫はまるで色まで奪っていくのではない  
かと見まがわせるほどだ。

フレーベルの愛した林間散歩は、茸取  
りという、胃を歡ばせる実用的な趣味に  
変えさせる。葉をふるいおとした冬の木  
立に入る木洩陽に久々に森の明るさをと  
りもどす。衣をつけない木々には落葉の  
厚さと、この陽のぬくもりが必要であろ  
う。雪でおおわれた山の中にも静けさを  
求めて訪ねくる人も少なくない。雪が音  
を吸いこむ機能を知って驚くらしい。新  
雪に自分の足跡をつけて道を作るのも、  
苦勞が多い代りに楽しさも加わる。林間  
滑走はゲレンデスキーにない開拓者の心  
につないでくれる。

山の生きた古老の話を、火をかこんで  
聞いていると、回想の喜びに比べて後継  
者の乏しいことに眉をくもらせるが、本  
当の自然観を身につけた子らが山の伝統  
をやがて担うであろう。

(大町幼稚園・牧師)